

# 監修の序

肝疾患診療は、胆臍、消化管領域とともに消化器内科診療の一つの領域であるが、我が国においては肝臓病が国民病と言られてきた歴史もあり、我が国の消化器病診療を牽引してきたといえる。肝疾患に関する診断と治療の進歩は著しい。私は1980年（昭和55年）の卒業であるが、C型肝炎ウイルスが未発見であった80年代の肝疾患診療は、外来における採血（ALT値のフォローアップ）と「肝庇護剤」の投与に終始していた。肝の画像検査においてもシンチグラムで大きなSOLが見つかるという時代であり、肝癌治療においては、ようやく肝動脈塞栓術（TAE）が普及しつつあったが、肝癌診断後の平均余命は6カ月あまりという状況であった。

その後、B型肝炎、C型肝炎に対する抗ウイルス薬が開発され、ウイルス肝炎は根治的なレベルで改善されてきた。これらの治療薬剤の進歩に歩を合わせて進歩してきたのが、肝臓に対する画像診断とインターベンション治療である。画像としては、CT、MRI、造影を含む超音波検査、それらを利用するソフトの開発も急ピッチで行われた。治療についても、肝癌に対するラジオ波焼灼術等の経皮的治療、経カテーテル治療・化学療法、食道静脈瘤の内視鏡的治療等、その進歩は著しく、肝疾患患者の予後を大きく改善した。しかし、当然ながら、これらの手技の習得は容易いものではなく、多くの時間をかけて習熟していく必要がある。

技術習得においては見てマネをする行為が最も効果的である。しかし、誰もが「お手本」を身近にもてるわけではない。技術が高度なものとなればなおさらである。そこで今回、『動画で身につく肝疾患の基本手技－インターベンション治療の秘訣』なる本を上梓する運びとなった。基本的な超音波手技のコツ、ラジオ波治療の極意、IVR手技等を中心として、懇切丁寧な指導が続く。何よりも「動画付き」であることが、視覚に訴える領域の技術習術において最良のお手本となる。視覚重視世代の先生にも、また、その上の世代の先生にも、本書は必ず役立つであろう。

2013年7月

東京大学大学院医学系研究科消化器内科学 教授  
小池和彦